



俳人。書家。松山城下(現、松山市)出身。本名は兼五郎。伊予尋常中学校(現、県立松山東高等学校)で高浜虚子と同級となる。中学3年生で俳句を学び、初めて俳句集を作って正岡子規の添削を受け、明治24(1891)年、虚子らと「松山俳句会」を結成し、子規の指導を受けた。やがて、新進俳人として虚子とともに正岡子規門下の双璧といわれ、俳誌『ホト、ギス』や他の新聞・雑誌で俳句の選者として活躍した。子規没後、平凡単純な写生の句に飽き足らなくなり、「俳三昧」と称する勉強会に励み、「新傾向俳句」を唱えて全国旅行を行い、虚子の守旧派と対立を見せた。この新傾向俳句はやがて定型破壊、季語無用の流れとなり、自らの自由律俳句を「詩」と称するようになった。書にもすぐれ、子規が「天資の能」と称賛する能筆で自在な書風であった。その他にも能楽家、旅行家として卓越した識見をもっていた。

全国旅行の見聞をまとめた『三千里』、『続三千里』の著作がある。

略歴

明治6(1873)年2月26日	松山城下の千船町 <small>ちふねまち</small> に生まれる。
明治21(1888)年	伊予尋常中学校に入学
明治24(1891)年	高浜虚子らと「松山俳句会」を結成
明治26(1893)年	京都の第三高等中学校(現、京都大学)に入学し、虚子と一緒に下宿する。
明治27(1894)年	仙台の第二高等中学校(現、東北大学)に転学するが、退学して上京
明治28(1895)年	神戸の病院で療養中の正岡子規を看護 新聞『日本』に入社。翌年退社
明治35(1902)年	新聞『日本』の俳句欄選者を子規から継承
明治36(1903)年	新聞『日本』に再入社 『ホト、ギス』に「温泉百句」を発表、虚子との論争へ発展
明治39(1906)年	日本全国行脚(俳句旅行)へ出発(同40年まで)
明治42(1909)年	2度目の全国行脚に出発(同44年まで)
明治44(1911)年	碧派の機関誌『層雲』を創刊
大正4(1915)年	俳誌『海紅』を創刊
大正14(1925)年	俳誌『三昧』を創刊し、無季自由の句作
昭和4(1929)年	『新興俳句への道』を刊行
昭和8(1933)年	還暦を期して俳壇を引退
昭和12(1937)年2月1日	65歳で永眠。墓所は松山市朝日ヶ丘の宝塔寺と東京都台東区三ノ輪の梅林寺 (写真提供：松山市立子規記念博物館)

〈関連図書〉

- ・鶴村松一『伊予路の河東碧梧桐 文学遺跡散歩』 松山郷土史文学研究会 1978年
- ・愛媛県史編さん委員会『愛媛県史 文学』 愛媛県 1984年
- ・『現代日本文学大系(高浜虚子・河東碧梧桐集)』 筑摩書房 1985年
- ・愛媛県史編さん委員会『愛媛県史 人物』 愛媛県 1989年
- ・愛媛子どものための伝記刊行会『愛媛子どものための伝記 第19巻 高浜虚子・河東碧梧桐・種田山頭火』
愛媛県教育会 1989年
- ・栗田靖『河東碧梧桐』 蝸牛社 1996年
- ・栗田靖『河東碧梧桐の基礎的研究』 翰林書房 2000年

〈主な収蔵資料〉…(P224, 123)

〈ゆかりのある場所〉…(P309, 181~182)